

『隠州視聴合紀』の名所和歌

伊藤政彦*

(e-mail : shinkiku@hanmail.net)

目次

はじめに

1. 「和歌」と鎮魂
2. 流刑の島としての隠岐
3. 『隠州視聴合紀』の和歌
 - (1) 流人たちに対する鎮魂
 - (2) 統治の安寧を祈る
 - (3) 新島守としての後鳥羽院への共感
 - (4) 後鳥羽院に対する追慕

おわりに

はじめに

1667年(寛文7)に出雲松江藩士斎藤豊宣が著した『隠州視聴合紀』は独島/竹島領有問題が議論される際に言及されることが多い。それは同書の冒頭「国代記」に見える「然則日本之乾地、以此州為限矣」との記述に関し「此州」が鬱陵島を指すのか、隠岐国を指すのか、その解釈によって同島の領有に関する論議の帰趨に少なからぬ影響を与えるためである。1950年代に日本政府は『隠州視聴合紀』の上掲の記述をもって江戸時代の日本人が竹島(鬱陵島)が日本の乾=西北の果てであると見、それよりも日本寄りにある独島/竹島を自国に属するものと考えていたと主張する根拠とした。しかしこの問題については池内敏(2006)が『隠州視聴合紀』全体にあらわれる「州」の用例を綿密かつ詳細に検討した結果、同書の他の部分において「州」は隠岐国を指す言葉として使用され

* 우송정보대 관광일본어과 조교수

ていることを明確にしたことから明らかなように、同書の上引用の記述に見える「此州」は隠岐国を指していると考えるのが妥当である。したがって『隠州視聴合紀』のこの記述をもって日本の鬱陵島および独島/竹島の領有意識の根拠とするのは無理があると言わざるを得ない。史料の一部分だけを切り取って判断するのではなく、全体を客観的に読むならば結論は自ず明らかであろう。

さて、『隠州視聴合紀』が独島/竹島の領有論議の過程で世に広く知られるようになり、冒頭でも述べたように現在も同書は独島/竹島の領有問題に関連づけて言及されることが大部分である。しかし斎藤豊宣は果たして独島/竹島の領有権を明らかにすることを目的として『隠州視聴合紀』を著したものであろうか。決してそうではあるまい。

『隠州視聴合紀』の構成はまず序および上述の巻1「国代記」がありここで中世以来の隠岐国全体の歴史が述べられる。ついで巻2以下では隠岐の各地について郷・村・里の単位で地理的特徴が述べられ、それぞれの単位ごとに名所旧跡や故事が紹介される。いわば隠岐国の地誌である。すなわち巻2は島後の「周吉郡」について記し、巻3は同じく島後の「穩地郡」について記す。巻4は島前紀として「知夫郡」と「海部郡」について一括して記している。1) こうした構成からみると表向きの同書の編纂目的は隠岐国の地誌を明らかにすることであったように思われる。

それでは『隠州視聴合紀』はどのような事情を背景として編纂されたのであろうか。隠岐はそれまで江戸幕府の直轄地であったが、松平直政が信州松本から移封され松江藩藩主となった1638年(寛永15)から同藩の預かりとなった。2)そして1666年(寛文6)に第2代藩主となった松平綱隆は藩主となるや直ちに父祖の年譜や藩士の由緒を正確に知るための諸書編纂を藩儒に命じている。そして松平綱隆は父祖や藩士といった人に関する情報収集だけでなく土地、すなわち藩の管轄地域のうち未調査であった隠岐国についても詳しく知ろうとしたと思われる。このような動きが『隠州視聴合紀』の編纂につながったと見られる。3)

上述のように『隠州視聴合紀』を著した斎藤豊宣は出雲松江藩の藩士で1667年(寛文7)に藩主松平綱隆により隠岐郡代役を命じられている。斎藤は隠岐へ渡って任地をくまなく巡視しながら古老から伝説や遺聞を集め、地理産物等について書き留めたのであり、それが『隠州視聴合紀』である。言うなれば任地に関して藩主へ報告するための報告書である。このような事情を勘案したとき、異質に見えるのが隠岐の風土誌とは直接的に関係のないとも言える巻4の最後に収められている「名所和歌」と、神社や仏教寺院の名前を列記した隠岐の「神名帳」および「国中仏寺」である。

本稿では『隠州視聴合紀』巻4に見える上述の「神名帳」「国中仏寺」「名所和

1) この後に付記として別途「焼火山縁起」と「文覚論」が収録されている。

2) 松尾寿ほか(2005)『島根県の歴史』山川出版社、p.202

3) 池内敏(2006)『大君外交と武威』名古屋大学出版会、p.330

歌」のうち特に「名所和歌」のもつ意味に対する考察を通して、同書が編纂された目的について考えてみたい。

1. 「和歌」と鎮魂

『隠州視聴合紀』巻4所収の「名所和歌」について考える前に、和歌の機能について見る必要があるだろう。かつて日本人は和歌がどのような機能あるいは働きを持っていると考えていたのだろうか。この問いに対する答えを端的に表わしている内容が『古今和歌集』「仮名序」に見える。『古今和歌集』は日本で最初の勅撰和歌集で、その在り方は以後ながく二十一代集をはじめとする日本の和歌文学の典範となり「仮名序」も以後の和歌集序文の規範とされて日本の文学論の基礎ともなった。

この『古今和歌集』の「仮名序」では和歌の本質、機能、起源、歌体、題材などについて述べられている。

やまと歌は人の心を種として、万の言の葉とぞ成れりける。(中略)力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ、男女の仲をも和らげ、猛き武人の心をも慰むるは歌なり。

まず『古今和歌集』の「仮名序」はその冒頭で和歌の本質について「人の心を種として万の言の葉とぞなれりける」すなわち和歌とは人間の心が言葉という形態であらわされたものであるとしており、和歌が人間の多様な感情の詩的表現であることを明らかにしている。

次にその機能としては、まず「力をも入れずして天地を動か」すとしている。ここで「天地」は「天神地祇」を意味する。これは具体的には神に対する祭祀祭礼の際の歌を言い、のちの時代の神祇歌や大嘗会和歌などに受け継がれている。また天神地祇すなわち神々をも動かしたとされる和歌と言うと、例えば『小町集』にあるように小野小町が「(日の照り侍りけるに、雨請ひの和歌詠むべき宣旨ありて)ちはやふる神も見まさは立騒ぎ天の戸川の樋口開けたまへ」と詠み、雨を得たとする伝説などが想起されよう。

次に「目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ」る働きがあるとしている。「鬼神」とは人間の目に見えないあの世の人の靈魂を指し、これらをも感激させるというのである。あの世の人の靈魂、死者に対する歌と言えば上代の場合「万葉集」の部立てにある「挽歌」がこれに当てはまるだろう。

尋常ではない死に方をした人の靈魂に対して古代人は恐れを抱いた。横死者の魂が祟りをなす、すなわちデーモニック的発動をすることが意識されたのである。こうした荒ぶる死靈を

鎮めるためには葬りまつることが必要と考えられた。そうすることでデーモンの発動を防止することが可能であると考えられたのであるが、4)このことは家を離れて行き倒れて死に、野ざらしのまま葬られることなく放置されている「行路死人」の死霊に対しても同様であった。『万葉集』におけるいわゆる「行路死人歌」もこのような「浮遊魂」を鎮魂するために詠まれたのであり、こうした歌に貫かれている基本的性格については沢瀉久孝が『万葉集注釈』で「いづれも家郷の妻に思ひを馳せてゐること趣を同じくしてゐる」としているように「家」や「妻」がうたわれることが指摘されている。行路死人のことを家に、妻に知らせ、靈魂をまつことで死霊が祟りを起すことを防いだと考えられよう。「鎮魂」とはカミやモノとしてあらわれる死者の霊が発現する過剰の威力を統御することであり5)、その手段として歌が用いられたのである。そしてそれは例えば次のような歌にも確認することができる。

をちちの　しまは　おほけど　なぐはし　さみねの　しまの　ありそ　もに　いほりて　みれば　なみのおとの
 (上略)彼此之　嶋者雖多　名細之　狭岑之嶋乃　荒磯面爾　廬作而見者　浪音乃
 しげきはまへを　しきたへの　まくらに　なして　あらとこに　ころふ　きみが　いへ　しらは　ゆきて　も　つげむ　つましらは
 茂浜邊乎　敷妙乃　枕爾為而　荒床　自伏君之　家知者　往而毛將告　妻知者
 きも　どはましを　たまほこの　みちだに　しらず　おほほく　まちか　こふらむ　はしき　つまら　は
 来毛問益乎　玉銚之　道太爾不知　鬱悒久　待加恋良武　愛伎妻等者(卷2-220)

これは「讃岐狭岑嶋視石中死人柿本朝臣人麻呂作歌一首　并短歌」の一部であるが、人麻呂は「狭岑嶋」の岩の上で死んでいる人を見てこのような歌を詠んだ。野垂れ死にした名も知らぬ人の靈魂に思いを馳せて鎮魂しているのである。和歌はこのように家郷や家族のもとを離れて死んだ人の魂、すなわち「浮遊魂」を慰め祟りを防ぐ鎮魂の機能を持つと古くから考えられていたのである。

2. 流刑の島としての隠岐

隠岐では家郷や家族のもとを離れ、恨みを呑んで死んだ人が多かったであろうことが容易に想像できる。それは隠岐が古く奈良時代から江戸時代に至るまで流刑の地であったためである。日本における流刑は古くは『日本書紀』允恭天皇24年6月条に軽大娘を伊予に流した記事などが見えるが、一定の法規として史書に見えるのは『続日本紀』聖武天皇724年(神亀元)3月庚申条に

4) 神野志隆光(1992)『柿本人麻呂研究』塙書房. p.384

5) 多田一臣(1991)『万葉歌の表現』明治書院. p.169

庚申、定諸流配遠近之程。伊豆・安房・常陸・佐渡・隠岐・土佐六国為遠、諏方・伊予為中、越前・安芸為近。(庚申、諸の流配の遠近の程を定む。伊豆・安房・常陸・佐渡・隠岐・土佐の六国を遠とし、諏方・伊予を中とし、越前・安芸を近とす。)

とあるのが初めである。隠岐はここで「遠流」の地の一つとされた。実際に740年(天平12)には藤原広嗣の乱に連座して広嗣の第6子であった藤原田麻呂がこの地に流されている(『続日本紀』延暦2年3月19日藤原田麻呂薨伝)。奈良時代にはこの他にも742年(天平14)に名草直高根の女が隠岐国へ配流になっており(『続日本紀』天平14年10月14日条)、752年(天平勝宝4)8月17日に京師の巫覡十七人を伊豆、隠岐、土佐等遠国へ配流したとの記事が同じく『続日本紀』に見える。さらに763年(天平宝字7)12月29日には造東大寺判官正六位葛井連根道が「酒を飲みて言語(かたら)ふこと時の忌諱に涉(わた)れるに坐(つみ)せられて」隠岐に配流となり、764年(天平宝字8)9月18日には藤原仲麻呂の乱(恵美押勝の乱)に際して仲麻呂の妻子徒党34人が斬られた中で六子であった刷雄だけが幼少より禅行を修めたことにより死を免れ隠岐国へ配流されている(『続日本紀』)。次いで764年(天平宝字8)10月9日には藤原仲麻呂と共謀したかどにより船親王が配流され、785年(延暦4)9月24日には藤原種継暗殺に連座して大伴家持の子右京亮大伴永主が隠岐国へ流されている(『日本紀略』)。このように奈良時代を通じて隠岐は主に政治犯の配流の地となっていた。

さらに平安時代に入って927年(延長5)年に成った『延喜式』にも

凡流人応配者依罪軽重、各配三流謂近中遠処、從京計文。延流移人者、省定配所申官具録犯状、下符所在並配所。其路程者從京為計。伊豆 去京 七百七十里
安房一千百九十里 常陸 一千五百七十五里 佐渡 一千三百二十五里 隠岐
九百十里

とあって平安時代以降も一貫して流人たちが送られたことがわかる。平安時代には遣唐副使としての乗船を拒否した小野篁が838年(承和5)に、承和の変で時の仁明天皇に対し謀反を企てたとされた伴健岑が842年(承和9)に、応天門の火災に際して放火犯とみなされた伴中庸などが866年(貞観8)に、安和の変で謀反を企てたとの密告をされた藤原千晴が969年(安和2)に、同族の平維衡と伊勢国の覇権をめぐる抗争し自身の非を認めなかった平致頼が998年(長徳4)にそれぞれ隠岐へ流されている。

中世に入ってからでも継続して隠岐は配流の地であったが、特筆すべきは鎌倉時代、1221年(承久3)に流された後鳥羽上皇と1332年(元弘2)に配流された後醍醐天皇であろう。

後鳥羽上皇は当時台頭しつつあった武士政権である鎌倉幕府に対抗して強硬な政策を取ってきたが、ついに1221年(承久3)5月14日に時の鎌倉幕府執権であった北条義時追討の院宣を出し、畿内、近国の兵を召集して「承久の乱」を起こした。しかし鎌倉幕府の大軍に完敗してしまう。6月15日に鎌倉幕府軍は京都に入って首謀者の処分を始め、後鳥羽上皇は7月6日に鳥羽殿に移されて13日にはわずかに藤原清房、西御方、伊賀局、和氣長成、藤原能茂など数名とともに京都を出発、8月5日に配流先の隠岐国阿摩郡苅田郷の行在所に到着したのであった。6)上皇は19年にわたる在島の末、京都に戻ることなく1239年(延応元)にこの隠岐の行在所で崩御した。後鳥羽上皇は『隠州視聴合紀』にも随所で紹介され、後でも触れるようにその和歌が「名所和歌」に採られている。また後醍醐天皇は1324年(正中元)の「正中の変」そして1331年(元弘元)の「元弘の変」という2度の倒幕計画に失敗して1332年(元弘2)に隠岐へ流された。井上寛司氏の調査によると古代中世の隠岐の流人は文献上に見える確実な例だけでも古代40名、中世11名にのぼるといふ。7)「上御一人」と呼ばれた天皇や上皇をも含めた多くの人々が隠岐へ配流され、そのうちには赦されることなく隠岐でこの世を去った流人も少なくなかったことであろうと思われる。

時代が下って江戸時代に入ってから蹴鞠と和歌の家として知られた飛鳥井家の飛鳥井雅賢が1608年(慶長13)に遊蕩の罪に問われて隠岐に流されている。また1661年(寛文元)には京都智積院住職出入につき罪を得た僧存識、謙盛、尊与らが隠岐に配流されるなどしている。

また『隠州視聴合紀』が著わされた時代よりも後になるが、江戸幕府第8代将軍の徳川吉宗により編纂が計画推進された江戸時代の基本法典である『公事方御定書』の遠島の条には

江戸より流刑の者、大島、八丈島、三宅島、新島、神津島、御蔵島、利島右七島の内に遣はし、京、大坂、西国、中国より流罪の分は薩摩五島島々、隠岐、天草に遣はす

とあって京、大坂、西国、中国からの流人を隠岐に流すことが定められている。貞享(1684～1688)のころまでは僧侶を含めて士分以上の身分の流人が多かったが、その後は一般庶民の流刑地にもなった。このように隠岐は古代から近世にいたるまで天皇から名もなき無数の人々が流された。

江戸時代の場合、直接的には村養いの形で各村の庄屋が流人の監督にあたったという

6) 田中豊治(1979)『隠岐島の歴史地理学的研究』古今書院。p.119

7) 井上寛司(1991)「文献からみた古代・中世の隠岐の流人」『隠岐流人に関する研究』平成2年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書所収。p.46

が、流人は結局のところ郡代、代官の監督下に置かれていたから隠岐郡代役であった齋藤豊宣も古今の流人について見聞するところが多かったであろうことが推察されるのである。

3. 『隠州視聴合紀』の和歌

(1) 流人たちに対する鎮魂

さて、はじめにも述べたように『隠州視聴合紀』の巻4には「名所和歌」が収録されている。それぞれ「鼓嵩」「隠岐海」「隠岐小島」「小峯島」「中港」「隠岐外山」「高田山」「籬島」「西里」「成沢池」「御陵 葛田山」と題された和歌であるが、ここでは齋藤豊宣がそれらの和歌をどのような意図のもとに『隠州視聴合紀』に収録したのかについて考えてみたい。まず、前章でみたような隠岐に流された人々の魂を慰めるためにここに収められたと思われるのが第4首目と第5首目の歌である。

4 夕されは小峯の島になく千鳥 あら磯なみにしほや盈らむ⁸⁾

「小峯島(さみねのしま)」を詠んだ第4首目の歌の作者は『隠州視聴合紀』には「孔惑」とあるが、この歌は1261年(弘長元)の「宗尊親王百五十番歌合」には藤原顕盛の歌として収められている。藤原顕盛は安達顕盛(1245-1280)のことと思われる。顕盛の母は飛鳥井雅経の女であるが、雅経は後鳥羽院の歌壇で活躍した歌人でもあった。1201年(建仁元)には和歌所寄人となっており、勅撰和歌集である『新古今和歌集』の撰者の一人でもある。こうした祖父を持つ顕盛も当時の鎌倉歌壇の構成員の一人として「宗尊親王家百五十番歌合」に参加したものであろう。小峯島は『隠州視聴合紀』巻2周吉郡布施村条に

布施村は寅卯は海にして浜に向ひて人家あり(中略)岸をはなれて七八町ばかり小峰嶋と云あり高き事七十尋上に松樹ありて北の方割立が如し廻れば百三十間俗此を左婦嶋と云則夕されば小峰の嶋と読し島なり音の誤りて如此と云なり

と見えており、ここで齋藤が「夕されば小峰の嶋と読し島なり」と紹介しているのが「名所和歌」のこの第4首目の歌を指している。歌意は「夕方になるとさみねの島に千鳥が鳴く。荒磯波に潮が満ちてきているのであろうか」となろう。

8) 「名所和歌」は続々群書類集本の『隠州視聴合紀』から引用し、それぞれの歌には便宜上収載の順番によって1から11までの番号をつけた。

ところで歌枕の「さみねのしま」と言えば隠岐の小峯島よりも『万葉集』に収められている柿本人麻呂の「讃岐狭岑嶋視石中死人柿本朝臣人麻呂作歌一首 并短歌」いわゆる「石中死人歌」に詠まれた讃岐の「狭岑の島」が古来有名である。

をちこちのしまはおほけど なぐはし さみねのしまの ありそ もに いほけて みれば なみのおとの
 (上略)彼此之 嶋者雖多 名細之 狭岑之嶋乃 荒磯面爾 廬作而見者 浪音乃
 いげはまへを しきたへの まくらに えて あらとこに ころふすきみが いへしらば ゆきて も つげむ つましらば
 茂浜邊乎 敷妙乃 枕爾為而 荒床 自伏君之 家知者 往而毛將告 妻知者
 きも とはましを たまほこの みちだに しらず おほほしく まちかこふらむ はしき つまら は
 来毛問益乎 玉銚之 道太爾不知 鬱悒久 待加恋良武 愛伎妻等者(巻2-220)

人麻呂は「狭岑の嶋」の岩の上で寂しく倒れている名も亡き死人を見てこのような歌を詠んだ。野垂れ死にした人の靈魂である「浮遊魂」に思いを馳せ、鎮魂しているのである。すなわち万葉の「狭岑之嶋」は人麻呂が家族らのもとを離れて独り寂しく死んだ人に対する同情の心を詠んだその舞台である。斎藤豊宣は「さみねのしま」といえば想起されるであろうこうした事情をもふまえ、隠岐に流されて家族のもとを離れて寂しく死んでいった人たちのことをも念頭に置きつつこの歌を「名所和歌」に収めたのではないかと思われる。なお、この第4首目に見える「小峯の島」を独島/竹島とする見解もあるようだが、それは何の根拠もない唐突な考えであって、上でも見たようにこの和歌に歌われている「小峯の島」は斎藤自身も上の引用文ではっきりと述べているように隠岐島後の布施村の海上7~8町の距離に浮かぶ左婦島を指していると考えるのが妥当であろう。

ところで、この歌に詠み込まれている「千鳥」は『万葉集』以来その鳴き声に注目して詠まれたものが多いが、この歌も例外ではない。夕刻や夜間、明け方に響く千鳥の声はしみじみとした心情をかきたてるものとして詠まれ、題材としては懐旧、望郷、恋情を主題とする歌に多く詠まれた。⁹⁾

こうした類型は平安文学にも継承されており、たとえば『源氏物語』須磨巻での千鳥の描写には流離の地での物寂しく人恋しい心情が託されていることも付言しておくべきであろう。同様に第5首目の

5 敷島や中のみなどの小夜ちどり つまよひたてゝ浦つたひ行

にも「千鳥」が詠み込まれている。この歌の作者公朝(?~1296)は鎌倉時代中期の人物で姉小路実文の子として生まれ、のちに北条朝時の猶子となった人物である。¹⁰⁾出家して

9) 秋山虔 編(2000)『王朝語辞典』東京大学出版会. p.274

10) 中川博夫(1983)「僧正公朝について—その伝と歌壇的位置—」『国語と国文学』60-9, 東京大学国語国文学会. pp.33-40

園城寺で別当まで至った僧侶で、主に鎌倉歌壇で活躍した歌人である。この歌の大意は「敷島の中の湊の夜に鳴く千鳥はつれあいを呼び立てて浦を伝いながら行く」となる。この歌は『風木和歌抄』巻25の「湊」の項に収録されているが、そこには讃岐の中の湊と記されている。この讃岐の「中の湊」は上でみた柿下人麻呂の「石中死人歌」に次のように見える。

たまもよし さぬきのくには くにからか みれどもあかぬ かむからか ここだ たふとき あめつち ひつきととにも たり
 玉藻吉 讃岐国者 国柄加 雖見不飽 神柄加 幾許貴寸 天地 日月与共 満
 ゆかむ かみのみおもと つぎきたる なかのみなとゆ ふねうけて わがこぎくれば げりやく
 将行 神乃御面跡 次来 中乃水門従 船浮而 吾榜来者(下略)(巻2-220)

しかしながらここでは讃岐ではなく隠岐の中の湊、すなわち隠岐の島前を構成する島の一つである中の島にある湊として斎藤は収録している。それは『隠州視聴合紀』巻4、知々井浦の項に

知々井浦は海の入こと遙にして山崎に松村あり。左り殊に指出たる此を知々井御崎と云克く東北の風を防ぐ故に旅泊の輻湊する所なり老人の曰昔より伝て此処を中の湊と云此も亦名場なり(下略)

とあることから明らかである。

千鳥の鳴き声を配偶者を呼ぶ声と見るのはすでに『万葉集』巻6の1062番歌に「浦渚には千鳥妻呼び」(田辺福麻呂)などに見えるように古代から続くイメージである。この歌もつまを呼ぶ千鳥に配流の地で家族を思慕したであろう流人の心情が仮託されているものとして斎藤豊宣がここに収めたと見てよからう。

さらに指摘すべきはこの歌の作者公朝が上で見た藤原顕盛と同様、1261年(弘長元)の「宗尊親王家百五十番歌合」に参加している点である。同歌合は將軍宗尊親王主宰の鎌倉歌壇の中で最大規模の催しであり、それに名を連ねている者を同歌壇の主要構成員と見なすことができるのである。公朝が宗尊親王歌壇における主要構成員であったことは「百五十番歌合」のみならず1261年(弘長元)9月9日の「中務卿親王家百首」「中務卿親王家五十首歌合」(夫木抄)「中務卿親王家歌合」などにもその名を連ねていることから窺い知ることができる。

また將軍宗尊親王と公朝の親交は親王が1266年(文永3)に鎌倉幕府への謀反の疑いありとして將軍を解任、京都へ追放された際に、公朝が宗尊親王を思慕する歌を詠んでいることからわかる。11)

11) 中務卿親王都へのほり給てのちよみける 「今はたゝと花とに音をそなく あはれしれかし人を恋つゝ」(『拾遺風体和歌集』巻7離別)

公朝の「名所和歌」第5首目の作品とともに上の顕長の第4首目の歌も「宗尊親王百五十番歌合」所収の作品であることは上述の通りであって、こうした事実は齋藤豊宣が鎌倉歌壇の宗尊親王周辺の歌に関心を持っていたとの推察を可能にする。宗尊親王は1272年(文永9)の二月騒動に連座して佐渡へ流され、近臣らも隠岐その他へ配流されている。齋藤が生きた同時代の後水尾歌壇の中心にあった後水尾天皇はのちにも述べるように江戸幕府からの強い圧迫のもとに生きた天皇であり、後鳥羽院に強い共感を持つと同時に同じように鎌倉幕府によって配流の憂き目に遭った宗尊親王の鎌倉歌壇にも親近感を抱いていたのであろう。こうした事実が齋藤豊宣をして鎌倉歌壇の歌を「名所和歌」に収録せしめたのではないかと推察される。

いずれにせよこの第4首目と第5首目の歌を通じて豊宣は「千鳥」に象徴される、遠い隠岐に流されて恨みをもって死んでいった靈魂たちに思いを致し、これを鎮魂することで自らの隠岐統治の安寧を祈ったものと思われるのである。

(2) 統治の安寧を祈る

『隠州視聴合紀』 「名所和歌」の第7首目から第10首目は島後都万の高田明神に奉納された「隠岐高田明神百首和歌」所収の作品である。

- 7 春さむき山は高田のたかければ 雪のしたよりたつかすみかな
- 8 なみまより山とみへつゝ夕くれの まかきかしまにたつかすみかな
- 9 いつる日の高田の山はあらはれて にしさととほくたつ霞かな
- 10 春にはやなる沢の池のうす氷 なをとけやらてさゆるころかな

まず「高田山」と題する准三后(二条良基)の第7首目の歌は「春になっても寒い山は高田山で、その名の如く高いので雪が残り、その雪の下から霞が立つことである」¹²⁾という内容であり、「籬島」と題した前左大臣(九条経教)の第8首目は「波間から山と見えていた夕暮れの籬の島に霞が立っている」という情景を詠んでいる。籬島は歌枕としては陸奥の籬島が古来有名であるが、ここでは『隠州視聴合紀』巻3都万県の項に

西山の外は海にして恩部島あり此を籬島と号して彼准三後の詠ぜし島也

とあるように都万の「恩部島」を指している。一般に和歌において「籬島」は

さてもなほ籬の島のありければ立ち寄りぬべく思ほゆるかな (『後撰和歌集』恋2清蔭)
あけくれは籬が島をながめつつ都恋しき音をのみぞ泣く (信明集)

12) 7首目から10首目までの歌意は小原幹雄(1992)『隠岐高田明神至徳百首和歌注釈』報光社から引用した。

のように「籬」の語が人をへだてるイメージを持っているため、陸奥における都恋しさの念を表現するのによく用いられたという。13)ここにも都を遠く離れて隠岐に流された後鳥羽院などのイメージが投影されていると見てよからう。

次に「西里」と題された浄阿上人の作品である第9首目は「高々と出て来る朝日に高田の山が現れて、西里一帯に遠く霞が立っている」という内容である。西里は高田山の西方の麓にある集落である。

「成沢池」と題された秀長(菅原秀長)の第9首目の歌意は「春に早くもなる成沢池の薄氷はなおすっかり融けきらないで、寒さのきびしいこの頃であることよ」となる。成沢の池は『隠州視聴合紀』巻3都万県の項に

此を高山(ママ)と云西の麓に一林あり高田明神の社なり伝て曰此峰に鳴沢池と云あり人至ることなし故に水源を知者なし其末流は社の左に出づ馬牛に至まで飲ことなし

と見え高田山に成沢池という神聖な池があったことを伝えている。

このように「名所和歌」のうち「隠岐高田明神百首和歌」所収のこれら4首の和歌にはいずれも島後・都万付近の地名が詠み込まれているが、特に7首目の歌に関しては「国見歌」としての性格を持っていることが大西俊輝氏によって指摘されている。14)古代における国見は元来は権力者が高所から国土を俯瞰して農作物の豊穰や人々の生活の平安を予祝する行為であった。斎藤も新たに着任した任地である隠岐での統治の安寧と五穀豊穰を祈念する意味でこの歌を「名所和歌」に収めたのではなかろうか。

さらにこれら4首の和歌のうち3首に「たつ霞」が詠み込まれている。かつては山川から立ち昇る雲や煙は自然の靈魂、つまり「国魂」の活動する姿と考えられており、国見歌における「立つ」という表現については『万葉集』の舒明天皇の国見歌(巻1-2)に見える「けぶり立ち立つ」「かまめ立ち立つ」が沸き上がる地霊の息吹きイメージを持つことが先学により指摘されている。15)この歌においても「霞たつ」姿を歌うことがとりもなおさず国讃めになるのであり、祝福と生成のイメージを象徴しているのである。

また7首目、8首目、9首目はいずれも結句が「たつかすみかな」となっており、この点については「儀式ばった」作歌態度を思わせると先学により指摘されている16)が、上述の事

13) 片桐洋一(1999)『歌枕歌ことば辞典』笠間書院 p.380.

14) 大西俊輝(2007)『続日本海と竹島』東洋出版. p.269

15) 土橋寛(1965)『古代歌謡と儀礼の研究』岩波書店. p.342

16) 小原幹雄(1968)「隠岐高田明神至徳百首和歌の考察」関西大学・島根大学共同調査会編『隠岐』、毎日新聞社. p.533

実も考え合わせると、これは古代の国見の儀式にも通ずる予祝的作歌態度と言い換えることができるであろう。

ところで「隠岐高田明神百首和歌」は1387年(至徳4)に隠岐を訪れた京都四条京極金蓮寺(四条道場)の五代浄阿が高田明神に泊った際に「花も夏に成沢の池の蓮哉」という明神の夢を得て感激し、帰京後に当時歌壇の実力者であった二条良基らを説いて勸進、奉納されたものである。17)斎藤豊宣も『隠州視聴合紀』巻3都万県の項でこの百首和歌について「最遠島の珍宝也」としている。この「高田明神百首和歌」は二条良基の手によるものと思われる次のような序文を伴っている。

(前文ヲ欠ク)めぐみ筑波山よりもしげし、我が君人を得給へることいかでか延喜天曆におとらむ、十旬の雨よくさ木をやしなひ五日の風あまねくあめつちをやはらぐ、此時にあたりてもろもろの明神国をたすけ代を□ばり給ふ事まことにいちじるし、隠岐の国はむかしの聖主道をもてあそび給ひし遺風もさだめてこのさかひに叡襟をとどめ給ひけむかし、かれといひこれといひ機縁純熟せりといふべし、このゆゑに金蓮寺上人かの神のつけをうけて渴仰のあまり百首の和歌千句の連歌を勸進して明神の法楽にそなふ、なるさは池の蓮八功德水にひらけたかだ山の松七重宝樹をあらはすものなり、かつはかの国ををさむる人たちまちに合浦の珠を□し邵国の棠をのこせるがごとし、しかあればいよいよ神明の加護も久しく聖代の徳化もあらたなるべしとなり

すなわち、この序文ではまず当時の天皇が人材を得ることが醍醐、村上両天皇の時代に天皇親政が行われ、王朝政治・王朝文化の最盛期として理想の時代とされた延喜・天曆(10世紀)に劣らず、気候が順調で天下が泰平であることを述べる。こうした状況のもと諸々の明神が国を助けていることとする。ついで、かつてこの地に流された後鳥羽院の遺風のとどまる隠岐を訪れた浄阿が百首和歌と千句連歌を奉納したことで成沢池の蓮が八功德水(極楽の池と須弥山と七金山との内海にある水)に開き、高田山の松は七重宝樹(極楽浄土の宝樹)をあらわすものであるとする。次の「合浦の珠」「邵国の棠」はそれぞれ中国の故事を指す。前者は合浦郡では珠を産したが前守が貪欲で珠は郡外へ去り、孟嘗が太守となるやその善政により去った珠が再び還ったという故事(『後漢書』循吏伝)であり、後者は周の召公の善政に感じて民がその宿った甘棠の樹を伐らなかつた(『詩経』)という故事を指す。いずれも善政が布かれていることを強調するものである。そしていよいよ神明の加護も久しく聖代の徳化もあらたであると結んでいるのである。

これはすなわち隠岐をはじめとする世の中に善政が布かれていることを称えているものであり、こうした意味合いのもとに奉納された百首和歌は隠岐郡代役の任にあった斎藤豊宣に

17) 吉永登・東郷富貴子(1957)「隠岐高田明神百首和歌について」『文学論集』第6巻第3・4合併号、関西大学 p.106.

とつても自身の統治の安寧と神明の加護を祈るという点で共感を持てるものであったろう。

このように隠岐を治める新任統治者として「国見歌」的な意味で自らの統治を予祝する意味で、また統治の安寧を祈り寿ぐ意味で斎藤は第7首目から第10首目に「高田明神百首和歌」のうちの4首を配したものと考えられる。

(3) 新島守としての後鳥羽院への共感

上述のように斎藤豊宣は1667年(寛文7)に松江藩主松平綱隆により隠岐郡代役を命じられている。天領と呼ばれた江戸幕府の直轄地は代官支配地と大名預所にわけられたが、大名預所とは近くに代官所のない場合に、近隣の大名にその管理を依頼したものを指す。¹⁸⁾松江藩において隠岐郡代は隠岐島後に3年在勤、「役組外」格の士で120石、島後・西郷に陣屋をかまえて隠岐の統治に当たった。¹⁹⁾

ところで斎藤豊宣が新たに隠岐に赴任するに際して「新島守」として共感を感じたであろう人物が後鳥羽院であった。後鳥羽院は当時台頭しつつあった武士政権である鎌倉幕府に対抗して強硬な政策を取ってきたが、ついに1221年(承久3)5月14日に時の鎌倉幕府執権であった北条義時追討の院宣を出し、畿内近国の兵を召集して「承久の乱」を起こした。しかし鎌倉幕府の大軍に完敗して7月8日に42歳で出家、7月13日に19万人の大軍を率いて上京した義時の嫡男泰時により隠岐島(隠岐国海士郡中ノ島)に流された。以後、京都に戻ることなく1239年(延応元)2月に60歳で隠岐国阿摩郡苅田郷で崩じている。名所和歌の2首目に収められた後鳥羽院の

2 われこそは新島守よ隠岐のうみ あらきなみ風こゝろしてふけ

という著名な歌は『遠島御百首』所収の作品であり、のち南北朝時代に成立した歴史物語の『増鏡』では院が隠岐に流されて間もない頃に、遠い都に思いを馳せつつ詠んだとされている。歌意は「私こそは新しい島の番人であるぞ。隠岐の海の荒々しい波風よ。充分配慮して吹け」²⁰⁾というものである。「新島守」とは「辺境防備の新兵」とするのが一般的だが「新任の島司」とする見解もある。²¹⁾斎藤豊宣も隠岐を治める任務を帯び「新任の島司」として着任した自身の立場と、かつての後鳥羽院の「新島守」の立場を重ね合わせ、共感をもってこの歌を名所和歌に収めたものであろう。

ところで「名所和歌」には豊宣の後鳥羽院に対する「新島守」としての共感を示したと

18) 永海一正(1972)『近世隠岐島史の研究』報光社。p.60

19) 中原健次(1997)『松江藩格式と職制』松江今井書店。pp.153-154

20) 樋口芳麻呂ほか校注(1991)『中世和歌集 鎌倉編』(新日本古典文学大系46) 岩波書店。p.214

21) 井上宗雄(1988)『増鏡』(上) 講談社。p.160

見られる歌がもう1首ある。それは第1首目の「鼓嵩」と題する紀輔時の

1 かゝり火の所さためす見へけるは なかれつゝみのたけはなりけり

という歌である。この歌の作者の紀輔時は生没年未詳、父は『古今和歌集』の撰者紀貫之の子で梨壺五人の一人である内蔵介時文である。この歌は『古今和歌集』および『後撰和歌集』に次ぐ勅撰和歌集で所謂「三代集」の一つである『拾遺和歌集』（寛弘3年＝1006年ごろの成立）の巻第7物名に収められている。

『拾遺和歌集』の詞書に見える「つゝみのたけ」は藤原公任の私撰集である『拾遺抄』宮内庁書陵部本では「つゝのみたけ」となっており、『拾遺和歌集』の和歌の本文もまた「つゝのみたけ」となっているものもある。「つゝのみたけ」とすると「筒の御岳」であり、肥後の山かとするが確実な所は分からない。一方「つゝみのたけ」とする場合は「鼓の岳」であり伊勢、隠岐、筑前などとする説があるが、これも確実なところは分からない。22)筆写の過程で「つゝのみたけ」と「つゝみのたけ」が混同され混乱が生じたものであろう。『拾遺和歌集』ではこの歌は「物名」という部立ての巻に入っている。「物名」は事物を歌の中に隠し詠む一種の言語遊技であり、この歌に即して見ると「つゝみのたけ」の場合「流れつゝみの焚けばなりけり」となり「つゝのみたけ」の場合「流れつゝのみ焚けばなりけり」と4句目と5句目にかけてそれぞれ隠し詠んでいることになる。歌意は「つゝのみたけ」の場合「篝火が場所を定めることなくあちらこちらに見えるのは、流れ流ればかりしながら焚くからであったのだ」となり、一方「つゝみのたけ」の場合「篝火が場所を定めることなくあちらこちらに見えるのは、流れる身で焚くからであったのだ」となろう。

こうした詮索はともかくとして『隠州視聴合紀』を著した斎藤豊宣は「名所和歌」の筆頭にこの歌を配した。つまりこのことは斎藤がこの歌の「鼓嵩」が隠岐にあると考えており、実際に「鼓嵩」と呼ばれる山が当時隠岐にあったという事を表わしている。

大西俊輝氏は「鼓嵩は、島前の海部郡に在る今の高峯という説がある。だがその岸辺の塘(つつみ)から高峯を仰ぎ見ることは出来ない」23)として隠岐第一の霊山「焼火山」を「鼓嵩」に比定している。「焼火山」はその名の示す通り「火」と関係のある山であり、隠岐軍団と本土の山陰道鎮撫使を結ぶ烽(とぶひ)の一中継地点でもあり同時に、24)古くから海の民の間における「焼火信仰」の中心であった。焼火信仰とはすなわちこの焼火山の神は海上で遭難しそうになった時に祈ると神火が現れ、その方向に向かって船を進めれば難を逃れ無事に港に入ることができるという信仰である。また、大晦日には毎年変わら

22) 小町谷照彦校注(1990)『拾遺和歌集』(新日本古典文学大系7) 岩波書店. p.111

23) 大西俊輝(2007)『続日本海と竹島』東洋出版. p.252

24) 田中豊治(1979)『隠岐島の歴史地理学的研究』古今書院. p.81

ず神火が海上から現れて焼火神社の前の神木に飛来し、それが年中不断の常灯になるという信仰もあった。さらに、この「焼火信仰」の一つの形態に「日の入りのお灯明」がある。

「オトウミョウ」の薪は削りかけ三本、棒に結わえたもので、先ず燧石を三度チョンチョンと打ち、然る後火をつける。それを右手に高く掲げ、トモのカジ柱の所に立って大声で次の様に唱える。——「お灯明、お灯明、お灯明オキの国タクシ(焼火)権現様に手向けます。よい漁に会わせ、よいアらしに会わせてくはなはれ。千日の上日和」。かく唱へ終るや、その火を三回頭上に大きく振り回して海中に投げ、(中略)右の式をカシキが行って居る時には船頭始め乗組全員舷に立って祈念をこらすのである。²⁵⁾

こうした信仰は遠く東北地方に至るまで広く行なわれていた。この「日の入りのお灯明」は東北地方で近代に入ってから行なわれていたものだが、焼火信仰の中心ともいえる焼火山の存在する隠岐でも年6回前後の航海をする北九州、瀬戸内への廻船が仕立てられる際には献灯の式が行なわれたという。²⁶⁾

海上に浮かんだ船の上で灯される灯明はまさしく「所定めず」にともされる火であり、この風景あるいは遭難しかけた船舶から望見されたとされる篝火の姿に当時隠岐で知られていた「鼓嵩」をかけたものとして斎藤はここに収録したのであろう。

さて、この歌と後鳥羽院の関係であるが、『隠州視聴合紀』に付記として収録されている「知夫郡焼火山縁起」に次のような記述がある。

承久年中 後鳥羽院狩于斯也 日既暮矣 暴風起波瀾立 王乃詠曰「朕古曾波新嶋守
与隠岐濃海荒幾浪風心志而吹」於是風浪漸収 然而夜闌月役 官船不知所之 漂泊
於中流 風波又欲起 王心念天 時遙火在雲間 其余光照海 黄郎得便扈從奉賀也

すなわち、承久3年(1221)に後鳥羽院が配流先の隠岐に向かう途中、日が暮れてから海上で暴風に遭った。そこで後鳥羽院がすでに上で見た「われこそは新島守よ隠岐のうみあらしなみ風こゝろしてふけ」の歌を詠ずると風波が静まり、その後暗闇の中で方向を失ったが、院が海上船中より祈願をこめると雲間に神火が示現してそれをたよりに隠岐に着くことができたとする伝承である。ここで「新島守」としての後鳥羽院を隠岐へと導いたのは言うまでもなく焼火の神火である。

ここでは「われこそは」の歌は『増鏡』とは異なり後鳥羽院が隠岐に配流されてゆく船中で詠まれたことになっており、斎藤もこの伝承を承知していた。隠岐第一の霊山と後鳥羽

25) 小坂勝昭編(2002)『離島「隠岐」の社会変動と文化』御茶の水書房. p.167

26) 大島正隆(1962)「海上の神火」『隠岐郷土研究』第7号, 隠岐郷土研究会. p.23

上皇を隠岐に導く神火を詠んだこの歌は「名所和歌」の冒頭歌としてふさわしいと言えるし、隠岐へ新たに赴任した豊宣が「新島守」としての後鳥羽院への共感をもってこの歌を第1首目に配したとも考えられるのである。

(4) 後鳥羽院に対する追慕

上で斎藤豊宣の「新島守」としての後鳥羽院に対する共感をもとに収められたと思われる歌について見たが、「名所和歌」にはこの他にも後鳥羽院の歌が1首収録されている。

3 なみまなき隠岐の小島の浜ひさし ひさしくなりぬ都へたてゝ

「隠岐小島」と題されているこの歌は『万葉集』の「浪間従 なみのまゆ 所見小嶋之 みゆる こじまの 浜久木 はまひさぎ
ひさしくなりぬ きみにあはずして
 久成奴 君爾不相四手」(巻11-2753)を本歌とするもので元来『増鏡』所収の作品である。配流先の隠岐における孤影悄然たる後鳥羽院の姿を髣髴させる歌である。²⁷⁾

歌意は「波の絶え間もない隠岐の小島の浜辺の家に住んでから久しくなった。遠く都を隔てていて」となる。絶えることなく波が打ち寄せる隠岐の小島で遠く離れた都に思いを馳せる心を詠んだ歌である。この後鳥羽院の歌を収録することを通じて斎藤豊宣は自らの意に反して隠岐へ流された院への追懐の念を表していると見ることができよう。後鳥羽院に対する追慕の念を表わす歌はこの他にも第6首目の

6 くも霞うみより出てあけそむる 隠岐のとやまや春をしるらん

がある。「隠岐外山」と題されたこの歌は後水尾院の作品である。『後水尾院御集』春に収められているこの歌はまた、隠岐国奉納歌二十首の巻頭歌である。²⁸⁾『読史愚抄』1632年(寛永9)3月条に

水無瀬中納言氏成。參後鳥羽院隠岐御墳墓。或作去月廿日。此序院被納御製和哥。二十首。

と見え、さらに同書の1639年(寛永16)2月22日条には

後鳥羽院四百回聖忌。水無瀬前中納言氏成、參隠岐御墳墓。去寛永九年亦參。俱

27) 井上宗雄(1988)『増鏡』(上)講談社 p.165

28) 芦田耕一(1991)「村上助九郎氏所蔵『和歌』一解題と翻刻」『山陰地域研究』(伝統文化)7, 島根大学山陰地域研究総合センター, p.40

私儀。此次、公家被献御剣馬。自院被献御法楽和歌者。

とある。春の訪れへの喜びと後鳥羽院ゆかりの地である隠岐に対する賞賛の気持を詠んだ第6首目のこの歌は、上記のいずれかの機会に水無瀬氏成によって後鳥羽院の墓前に奉納されたものである。

後水尾院は後鳥羽院を慕い、並々ならぬ共感を感じていた。その理由について鈴木健一氏は後鳥羽院と後水尾院のいずれもが

(1)政治的な挫折を経験した。

(2)歴代の天皇のなかでも文学活動を熱心に行なった一人である。

ことを挙げている。29)すなわち、後鳥羽院は5歳で即位し、19歳で院政を開始した。そして42歳の時に承久の乱により隠岐に配流され、そのまま京都に戻ることなく隠岐で亡くなっている。一方、後水尾院は16歳で即位し、1629年(寛永6)に34歳で譲位した。1615年(元和元)に『禁中並公家諸法度』が制定されるなど、即位当初から天皇としての政治活動は制約を受けていた。譲位の理由は表向きは腫れ物に悩まされたためとされているが、その裏には紫衣事件など江戸幕府との関係の悪化があったと思われる。このように後水尾院は自身と同様に朝幕関係の軋轢に悩んだ後鳥羽院に親近感を抱いていたのである。両者ともに文学、特に和歌に秀でていたという点も共通点である。

後水尾院は毎年後鳥羽院の命日である2月22日に後鳥羽院ゆかりの地である水無瀬離宮で水無瀬宮法楽和歌会を開いていたが、後鳥羽院没後400回忌に当たる1638年(寛永15)には特に「後鳥羽院四百年忌御会」を開き、

こひつゝもなくや四かへりもゝちどり 霞へだてて遠きむかしを

という歌を詠んで後鳥羽院を偲んでいる。この歌は「今年の春の千鳥たちは(後鳥羽院を)恋い慕いつつ鳴くのだろうか。霞に隔てられて遠く霞んでいるあの四百年の昔を」という意味である。30)以上のような事実からも後鳥羽院が後水尾院歌壇において特別な存在であったことがわかる。「名所和歌」第6首目の歌も後鳥羽院が配流された隠岐の人里近い山の春を詠んだものではあるが、奉納の経緯をみても後水尾院の後鳥羽院への思慕、追悼の念が込められた歌と見てよからう。

最後に「名所和歌」第11首目の「御陵 葛田山」と題された藤波友忠の

11 隠岐の海の憐れを思ふ人はかりと とへとこたへすら風やふく

29) 鈴木健一(1996)『近世堂上歌壇の研究』汲古書院。p.125

30) 松野陽一・上野洋三校注(1996)『近世歌文集(上)』(新日本古典文学大系67)岩波書店。p.16.

であるが、この歌も上の第6首目の後水尾院の歌を巻頭歌とする隠岐国奉納歌二十首のうち1首で、この歌は奉納歌の掉尾を飾る最終歌である。「御陵」とは島前・中ノ島の後鳥羽院の廟所を指す。豊宣は『隠州視聴合紀』巻4海部郡森郷に

畦道を分過れば三町ばかりにして山下に源福寺有是を葛田山と云後鳥羽上皇の御陵なり
門に二王有り(中略)此より四十間ばかり石磴を山に上る半過てりに入左右松竹凄々として
緑蘿籬に蔓り又一小門あり鞠躬として入れば拜所の前に至る御廟其後に高し欄干を設て
塔上に登る四方は皆喬木にして竹籬を引囲む其間は小石磷々たり遊客も来こと希に落ち
葉も勤めて不掃見に落涙感慨自生ず

と後鳥羽院の廟所を訪れた際の様子を記し、自らの意に反して隠岐に流された院に対する「感慨」を表現している。

斎藤豊宣は隠岐に流されて失意のうちに亡くなった後鳥羽院の靈魂を追慕し、慰める歌を「名所和歌」に掲げることにより自身の隠岐統治の無事と安寧を祈ったものであろう。このように『隠州視聴合紀』の名所和歌は後鳥羽院が隠岐へ上陸する際の神火をもってはじまり、後鳥羽院の陵墓で院の魂を慰める歌で締めくくられているのである。

おわりに

和歌は言うまでも文学の一ジャンルであるが、純粹に文学としてだけではなく何らかの役割を期待されていた。上でも述べたように『古今和歌集』の「仮名序」は和歌が「目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」る力、すなわち目に見えないあの世の人の靈魂をも感激させる力を持つものと認識されていたことを示している。また『万葉集』のいわゆる行路死人歌などの異常な死を遂げた人物を対象とする歌群からは歌にこの世を去った人の靈魂を慰めてアレヤタタリが発現しないように鎮魂する呪力が備わっていると見られていたことを知ることができる。

以上の事実を念頭に置くと、斎藤豊宣が『隠州視聴合紀』に11首の「名所和歌」を収録した理由は単に隠岐の名所や歌枕を紹介するためだけでなく、他の理由があったのではないかと思われるのであり、本稿では「名所和歌」がいかなる目的で収められたのかについて考察を試みた。

すなわち斎藤は1首目と2首目の和歌を通じ、かつて隠岐に配流された後鳥羽院に対して新たに赴任した「新島守」としての自身の立場を重ね合わせて共感を示した。

そして3首目、6首目、11首目の3首の和歌を通じ、19年という長い歳月を隠岐で過ごし、おそらくは都を思いながら苅田郷の配所で寂しく世を去った後鳥羽院への追慕と鎮魂の念を示した。

また、後鳥羽院のみならず隠岐は古くから流刑の地であって無数の人々が配流されており、隠岐郡代として流人を監督する位置にあった斎藤は4首目と5首目の和歌を収録してこれらの家郷を離れて隠岐に流されてきた流人たちの心に思いを致すとともに鎮魂し、同時に朝暮関係の桎梏に苦しんだ宗尊親王への関心もしめしている。

そしてさらに世の中に善政が布かれていることを称える意味も込めて島後都万の高田明神に奉納された百首和歌からの国見的な詞章を想起させる7首目から10首目までの4つの和歌を名所和歌に収録することで斎藤豊宣は自身の統治の安寧と神明の加護を祈り、寿いだったのであった。以上のようなことが斎藤豊宣が『隠州視聴合紀』に「名所和歌」を収録した理由であると推察されるのである。

また冒頭でも述べたように『隠州視聴合紀』は独島/竹島の領有問題が論議される際に言及されることが大部分であるが、はじめにも指摘したように同書の国代記の「然則日本之乾地、以此州為限矣」という記述の「此州」は隠岐国を指すと考えられ、鬱陵島や独島/竹島の領有意識を明らかにしているのではない。したがって斎藤が同書を編纂した意図は鬱陵島や独島/竹島の領有を主張するといった点にあったのではなく、自身の新たな任地である隠岐の地誌に関する情報を藩主に報告すると同時に、配流者など死者の魂を慰めることで自身の統治の無事と安寧を願う点にあったのではないかということの本稿では名所和歌の分析を通じて指摘した。本稿が『隠州視聴合紀』を読む際に多様な角度から接近することも可能だということを示すささやかな試みになったとすれば幸いである。

【参考文献】

- ・ 秋山虔編(2000)『王朝語辞典』東京大学出版会. p.274
- ・ 片桐洋一(1999)『歌枕歌ことば辞典』笠間書院. p.380
- ・ 池内敏(2006)『大君外交と武威』名古屋大学出版会. p.330
- ・ 池田弥三郎(1973)「万葉びとの婚姻と葬儀」万葉集講座第2巻『思想と背景』有精堂出版. p.171

- ・井上寛司(1991)「文献からみた古代・中世の隠岐の流人」『隠岐流人に関する研究』平成2年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書所収. p.46
- ・井上宗雄(1988)『増鏡』(上)講談社. p.160
- ・大西俊輝(2007)『続日本海と竹島』東洋出版. pp.251-279
- ・尾畑喜一郎(1996)「持統天皇と吉野世界一國見歌を中心として」上代文学会編『万葉の歌と環境』笠間書院. pp.11-13
- ・神野志隆光(1992)『柿本人麻呂研究』塙書房. p.384
- ・小坂勝昭編(2002)『離島「隠岐」の社会変動と文化』御茶の水書房. p.167
- ・小原幹雄(1968)「隠岐高田明神至徳百首和歌の考察」関西大学・島根大学共同調査会編『隠岐』, 毎日新聞社. p.533
- ・小原幹雄(1992)『隠岐高田明神至徳百首和歌注釈』報光社. pp.13-21
- ・小町谷照彦校注(1990)『拾遺和歌集』(新日本古典文学大系7)岩波書店. p.111
- ・鈴木健一(1996)『近世堂上歌壇の研究』汲古書院. p.125
- ・多田一臣(1991)『万葉歌の表現』明治書院. p.169
- ・田中豊治(1979)『隠岐島の歴史地理学的研究』古今書院. p.119
- ・土橋寛(1965)『古代歌謡と儀礼の研究』岩波書店. p.342
- ・中原健次(1997)『松江藩格式と職制』松江今井書店. pp.153-154
- ・永海一正(1972)『近世隠岐島史の研究』報光社. p.60
- ・樋口芳麻呂ほか校注(1991)『中世和歌集鎌倉編』(新日本古典文学大系46)岩波書店. p.214
- ・松尾寿ほか(2005)『島根県の歴史』山川出版社. p.202
- ・松野陽一・上野洋三校注(1996)『近世歌文集(上)』(新日本古典文学大系67)岩波書店. p.16
- ・芦田耕一(1991)「村上助九郎氏所蔵『和歌』一解題と翻刻一」『山陰地域研究』(伝統文化)7, 島根大学山陰地域研究総合センター. p.40
- ・大島正隆(1962)「海上の神火」『隠岐郷土研究』第7号, 隠岐郷土研究会. p.23
- ・中川博夫(1983)「僧正公朝について—その伝と歌壇的位置—」『国語と国文学』60-9, 東京大学国語国文学会. pp.33-40
- ・吉永登・東郷富貴子(1957)「隠岐高田明神百首和歌について」『文学論集』第6巻第3・4合併号, 関西大学. p.106

要 旨

1667年(寛文7)に出雲松江藩士齋藤豊宣が著したとされる『隠州視聴合紀』は独島/竹島領有問題が議論される際に言及されることが多いが、同書は果たして独島/竹島の領有権を明らかにすることを目的として書かれたものなのだろうか。決してそうではあるまい。『隠州視聴合紀』の著者とされる齋藤豊宣は出雲松江藩の藩士で1667年(寛文7)に藩主松平綱隆により隠岐郡代役を命じられている。齋藤は隠岐へ渡って任地をくまなく巡視しながら古老から伝説や遺聞を集め、隠岐の地理、産物等について書き留めたのであり、それが『隠州視聴合紀』である。言うなれば任地に関して藩主へ報告するための報告書である。このような事情を勘案したとき、異質に見えるのが隠岐の風土誌とは直接的に関係のないとも言える巻4の最後に収められている「名所和歌」である。

本稿では『隠州視聴合紀』巻4に見える上述の「名所和歌」のもつ意味に対する考察を行なった。齋藤豊宣は『隠州視聴合紀』の「名所和歌」を通じて隠岐の歌枕を紹介だけでなく1首目と2首目の和歌を通じてかつて隠岐に配流された後鳥羽院に対して新たに赴任した「新島守」としての自身の立場を重ね合わせて共感を示した。そして3首目、6首目、11首目の3首の和歌を通じ、19年という長い歳月を隠岐で過ごし、荇田郷の配所で寂しく世を去った後鳥羽院への追慕と鎮魂の念を示した。また、後鳥羽院のみならず隠岐は古くから流刑の地であり、無数の人々が配流されており、隠岐郡代として流人を監督する位置にあった齋藤は4首目と5首目の和歌を収録してこれらの家郷を離れて隠岐に流されてきた流人たちの心に思いを致すとともに鎮魂し、同時に朝暮関係の桎梏に苦しんだ宗尊親王への関心も示している。そしてさらに世の中に善政が布かれていることを称える意味も込めて島後都万の高田明神に奉納された百首和歌からの国見的な詞章を想起させる7首目から10首目までの4つの和歌を名所和歌に収録することで齋藤豊宣は自身の統治の安寧と神明の加護を祈り、寿いだのであった。以上のようなことが齋藤豊宣が『隠州視聴合紀』に「名所和歌」を収録した理由であると推察されるのである。

キーワード：隠岐、隠州視聴合紀、名所和歌、流人、鎮魂、統治の安寧

투 고 : 2009. 5. 31

1차 심사 : 2009. 6. 13

2차 심사 : 2009. 6. 27